東京文化財ウィーク

北多摩を歩いてみませんか

多摩川と荒川（入間川）に挟まれた広大な台地、武蔵野台地。台地の北側で埼玉県と接する北多摩には、柳瀬川、黒目川などが台地端を開削して流れ、湧水もみられます。

今回のコースは、古代の「東山道武蔵路」や中世の「鎌倉街道」などの「みち」が通り、交通の要所として様々な文化財が点在している東村山市と、そこから東に通じる街道や村に点在する清瀬市や東久留米市の文化財をめぐります。新田義貞ゆかりの文化財である久米川古戦場跡や板碑、また国宝の正福寺地蔵堂など鎌倉時代を感じる文化財のほか、縄文時代や弥生時代の遺跡にも触れることができます。

北多摩の歴史を感じながら、文化財巡りをお楽しみください。

東京都

正福寺地蔵堂

公開情報

清瀬市

中里の富士塚 清瀬市中里 3-991
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

清瀬市郷土博物館 清瀬市上清戸 2-6-41
公開日　通年（月曜（祝日の場合はその翌日）、年末年始を除く。）
公開時間　9：00 ～ 17：00
料　金　なし

■清瀬市内の文化財詳細情報は、清瀬市郷土博物館（tel.042-493-8585）まで

東久留米市

下里本邑遺跡 東久留米市野火止 3-4
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

新山遺跡 東久留米市下里 3-21-1
公開日　通年（2017 年改修工事を予定しており、工事中は御覧になれない時期があります。）
公開時間　終日
料　金　なし

村野家住宅 東久留米市柳窪 4-15-41
個人住宅のため普段は公開していません。特別見学会は、東久留米市広報等でお知らせいたします。薬医門と周辺の屋敷林は道路から見ることができます。

■東久留米市内の文化財等詳細情報は、東久留米市郷土資料室（tel.042-472-0051）まで

東村山市

恩多野火止水車苑 東村山市恩多町 3-32
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

梅岩寺のケヤキ 東村山市久米川 5-24-6
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

久米川古戦場 東村山市諏訪町 2 -21
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

板碑〈元弘三年斎藤盛貞等戦死供養碑〉
（徳蔵寺板碑保存館）東村山市諏訪町 1-26-3
公開日　通年（月曜を除く。）
公開時間　9:00 ～ 17:00
料　金　200 円

東村山ふるさと歴史館
東村山市諏訪町 1-6-3
公開日　通年（月曜・火曜（祝日・休日の場合は翌日）、年末年始、臨時休館日を除く。）
公開時間　9:30～17:00（入館は16:30まで）
料　金　なし

正福寺地蔵堂 東村山市野口町 4-6-1
公開日　通年（外観のみ。内部は例年 11 月 3 日公開）
公開時間　終日
料　金　なし

下宅部遺跡漆工関連出土品
（八国山たいけんの里）
東村山市野口町 3-48-1
公開日　通年（月曜・火曜（祝日・休日の場合は翌日）、年末年始、臨時休館日を除く。）
公開時間　9:30～17:00（入館は16:30まで）
料　金　なし

下宅部遺跡
（下宅部遺跡はっけんのもり）
東村山市多摩湖町 4-3-1
公開日　通年
公開時間　終日
料　金　なし

■東村山市内の文化財等詳細情報は、東村山ふるさと歴史館（tel.042-396-3800）まで

〒163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目8番1号　電話:03（5320）6862
教育庁地域教育支援部管理課

2017.9

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用しています
VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
東京都教育の日

北多摩を歩いてみませんか

今回御紹介する地域は、東久留米市、清瀬市、東村山市です。武蔵野台地は多摩川と荒川（入間川）に挟まれた広大な台地です。武蔵野台地の中央部は水の少ない地域ですが、武蔵野台地の東側（区部方向）ほどではありませんが、東久留米市などの北側でも新河岸川へ流れる柳瀬川、黒目川などが台地端を開削して流れ、湧水もみられます。

ここでは、公開されている国や都の指定文化財などを対象としているため、文化財との間が長くなっています。歩くルートをできるだけ無駄のないようにするため、今回のルートでは、清瀬駅を起点に、東久留米市をぬけ、東村山市へ向かう順で紹介していきます。

最初は、清瀬駅から中里の富士塚へはバスで出発し、富士塚から清瀬市郷土博物館、博物館から清瀬駅へ歩き、駅の南口へ渡ります。清瀬駅から中里の富士塚まではバスではなく、小金井街道を北へ歩いて向かうことも可能です。

清瀬駅からは商店街を抜け、小金井街道へ出ます。小金井街道と水道道路（野火止用水）が交差する五差路を右に折れ、しばらく野火止用水に沿って歩きます。野火止用水と別れ新小金井街道を南に向かうとすぐに下里本邑遺跡へ出ます。

下里本邑遺跡から黒目川に沿うようなルートで久留米西団地へ向かうと、下里小学校・中学校のある所が新山遺跡となります。新山遺跡からは、柳窪の農村景観が残る地域を通り、ルートを北西に向け、野火止用水に架かる恩多野火止水車苑から東村山駅方向へ出ます。

東村山市内では、梅岩寺から西側へ向かい、最後は下宅部遺跡から西武園駅へ出る順で紹介しています。東京都内唯一の国宝木造建造物正福寺地蔵堂を中心に、東村山市内では様々なルートがあります。東村山ふるさと歴史館などで確認してみるのも良いでしょう。

本ルートは、文化財間の距離がやや長いですが、実際に歩いてみると車や電車で移動したのでは分からない起伏や湧水、その水から成る中小河川と結びついた人々の営みに気付くことができます。

中里の富士塚

都指定有形民俗文化財　昭和60年3月18日指定

古来より日本人の信仰を集めてきた霊峰・富士。18世紀頃、富士信仰・富士登山が盛んになり、江戸を中心に富士講が多数できました。しかし、富士登山は危険でお金もかかるため、老若男女誰でも富士登山ができるようにと、富士山を模した富士塚を各地に築き、親しみを込めて「お富士さん」と呼んでいました。

中里の富士塚は、清瀬市郷土博物館から北へ500ｍほど歩いた住宅街に突如現れます。高さ約9メートル、直径15メートルほど赤土を盛り上げて円錐状に築いた富士塚です。

富士塚の北側から石鳥居をくぐると、正面に登山道が九十九折りに設けられ、「一合目」から「九合目」まで小さな石柱（合目石）が置かれています。山頂には、文政8年（1825）に造られた石の小さな祠と、大日如来を刻んだ根府川石の碑があり、登山道の途中にも富士信仰に関する様々な碑が建てられています。

築いたのは丸嘉講武州田無組中里講社で、頂上の祠と講社が持つ古文書の記載から、文政8年（1825）に築かれたとされています。今日でも富士登山や9月1日の「火の花祭り」などが行われています。

中里の富士塚

清瀬市郷土博物館

見て・触れて・体験して、新たな市民文化を創造していく、新しい形の博物館として昭和60年にオープンしました。

館内は歴史・民俗・映像展示室の他、清瀬の地形・歴史や伝統芸能・文化財などの情報を提供するインフォメーションセンター、先人の暮らしの一部を体験できる伝承スタジオなどを配置しています。また、武蔵野の雑木林を再現した木々や野草に囲まれたシルバーグレーの建物は、昭和62年（1987）に（一社）東京都建築士事務所協会の東京建築賞最優秀賞を受賞しました。

平成29年（2017）3月、当館のコレクションである「清瀬のうちおり」469点が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。「うちおり」とは、農家の女性たちが家族や自分のために、売り物にならない屑繭や残糸などで織った布や仕立てた着物のことです。洋服が普及する以前の伝統的な衣生活や、養蚕や織物が盛んだった多摩地域の家庭の衣料事情・染織技術を知ることができます。着物の柄や色合いなどには明治・大正・昭和の流行もうかがわれ、我が国の衣生活の変遷を考える上で重要なコレクションです。

清瀬市郷土博物館

下里本邑遺跡

都指定史跡　昭和59年3月22日指定

下里本邑遺跡は、黒目川最上流部の舌状台地（本邑台地）先端に位置する、旧石器時代から奈良・平安時代の複合遺跡です。昭和53年（1978）東京都住宅供給公社による集合住宅建設に伴い、発掘調査が実施されました。旧石器時代から縄文時代早期の遺物が台地下の礫層から出土したことは、生活の拠点は台地上に形成される、という従来の考古学的所見を覆す重要な発見となりました。

調査の結果、舌状台地先端部と河成低地保存区域の2か所、約8000平方メートルが保存されることになりました。舌状台地先端部は下里本邑遺跡公園として整備され、旧石器時代の礫群などが再現されています。また、黒目川に近い河成低地保存区域には、下里本邑遺跡館が建てられ、剥ぎ取り標本により復元された縄文時代早期の礫層上生活跡や出土遺物が展示されています。

下里本邑遺跡公園と本村小学校の間を縦貫する新小金井街道には、平成4年（1992）に本村小学校前横断歩道橋が架けられていますが、その欄干や歩道は、本村小学校の生徒による旧石器時代から縄文時代の生活を想像して描かれた版画やタイルで飾られています。

下里本邑遺跡館

新山遺跡

都指定史跡　昭和53年3月16日指定

新山遺跡は、黒目川上流部、標高61メートルの舌状台地平坦部に広がる、縄文時代中期後半の代表的な集落跡です。東久留米市立下里小・中学校の建設に伴い、昭和51年（1976）から昭和53年（1978）にかけて4次の発掘調査が実施され、竪穴建物跡30軒、土壙52基、配石遺構2基が確認されました。また、昭和57年（1982）の発掘調査でも、竪穴建物跡や土壙が検出されています。

竪穴建物跡は、直径100メートルの中央広場を取り囲むように分布しています。その多くは平面が不整円形ですが、張り出し部のある柄鏡形住居跡が5軒発見されています。張り出し部には埋甕（土器を埋めたもの）が多く、一部の住居址内からは細かく砕かれた石棒が出土するなど特徴的な住居も確認されています。

発掘調査に先立つ表面採集調査には、約250名もの市民が参加しました。そのため、発掘調査成果を基に、市民の代表、行政（東久留米市）及び研究者の3者が討議を行い、竪穴建物跡7軒、土壙7基について現地保存が図られました。市立下里中学校のグランド3034.67平方メートルが指定史跡の範囲です。

出土した土器や石器は、東久留米市立下里中学校に隣接する市立下里小学校内の新山遺跡資料展示室に展示されており、小学生の総合学習にも活用されています。

新山遺跡（東久留米市立下里中学校校庭）

村野家住宅

国登録有形文化財（建造物） 平成23年1月26日登録

村野家住宅のある柳窪集落は、江戸時代、寛文年間に開発された比較的新しい村で、ごく一時期を除いては幕府領でした。村内を流れる黒目川の流域には屋敷林や社寺、石仏・石碑が点在し、「武蔵野」を偲ばせる貴重な景観が残されています。東京都環境局指定の「雑木林の道（屋敷林の道）」コースにもなっています。

村野本家の主屋と長屋門は、埼玉県所沢市に移築されて東京国立博物館の所有となり、国の重要文化財（建造物）に指定されています。

この村野家住宅は、主屋のほか6棟が国の登録有形文化財（建造物）に登録されています。

薬医門は、正面に日の出が見えたことから「日の出門」と呼ばれています。総欅（そうけやき）造りで明治14年（1881）の建築です。

主屋は市内に残る唯一の茅葺家屋で、欅や杉の屋敷林に囲まれた佇（たたず）まいは江戸から明治初期の景観を保っています。建築年代は天保9年（1838）に遡り、安政4年（1857）、当初の四ッ間型から「おく」が増築されて六ッ間型となりました。土間には後に帳場が付け加えられており、商家であったことをうかがい知ることができます。付書院のある奥座敷の床柱には、慶應2年（1866）の「武州世直し一揆」による傷跡が残されています。式台玄関は昭和2年（1927）の建造です。

離れの建物は、婚姻関係にあった田無町（現・西東京市）の下田家から移築したものです。明治後期の建築ですが、大正後期に移築され、更に昭和25年に一部を洋風に改造しています。

その他、江戸時代末期に建築された土蔵や穀蔵、明治28年建築の蔵前付きの新蔵も現存しています。主屋と新蔵の間には、前庭と奥庭を画する中雀門が置かれています。中雀門は大正後期の建築です。

村野家住宅（薬医門）

同住宅は個人住宅であるため、普段は見学ができませんが、文化財ウィークに合わせて顧想園主催の特別見学会が開催されます。

野火止の水車苑（恩多野火止水車苑）と野火止用水

江戸は当初、神田上水や溜池などの水を利用していましたが、人口の増加などにつれ、江戸市中の飲用等のため多摩川から用水を引いたのが玉川上水です。幕府は承応2年（1653）、江戸町人の庄右衛門、清右衛門の兄弟に上水開削を請け負わせ、翌3年に完成しました。玉川上水は羽村の取水堰から四ツ谷大木戸まで43キロメートルを開削で通水し、大木戸から江戸市中は木樋等で配水しました。庄右衛門兄弟は開削の功により200石の扶持と「玉川」の姓などを賜りました。

工事は実際には難航し、老中松平伊豆守信綱などの尽力により完成したとされます。松平伊豆守は川越藩主で、通水の功により玉川上水を分水し、川越藩内へ通水することが許されました。承応4年（1655）、奉行安松金右衛門吉実などにより野火止新田用に多摩郡小川村（現・小平監視所）から、新河岸川へ流下するまでの約25キロメートルの分水を造ります。これが野火止用水です。野火止用水は玉川上水の最古で最大の分水で、玉川上水の3割ほども分水していました。

野火止用水は川越藩に対し許された用水ですので、川越藩領ではない現在の東京都内では新田開発等の利用はされていませんでした。そのため、野火止用水の通る小平市や東村山市などには恩恵はほとんどありませんでした。

恩多野火止水車苑の水車は、天明2年（1782）に旧大岱（おんた）村（現・東村山市恩多町に含まれる）の當麻（とうま）本家の酒造米の精米を目的に川越藩の許可を得て設置したといわれます。水車は直径7.5メートルにも及ぶ大きなもので、酒造業廃業後は脱穀などに利用し、水車業を営んだとされます。水車苑は、天明2年（1782）頃から戦後まで使われていた場所に水車を復元し整備したもので、東京都内では数少ない野火止用水の憩いの地となっています。

恩多野火止水車苑の水車

梅岩寺のケヤキ

都指定天然記念物　昭和 40 年 3 月 31 日指定

梅岩寺は、慶安 4 年（1651）阿山呑碩により中興開山されたと伝えられる曹洞宗の古刹です。山門の左右にケヤキが列植されていますが、山門の左手にある巨木が、東京都指定天然記念物の『梅岩寺のケヤキ』です。文化・文政年間に編纂された『新編武蔵風土記稿』の「久米川村」の条には、梅岩寺に関する記事があります。「周囲二丈許ノ古槻、或ハ一丈二尺許ノ椹樹、門ニ入テ左右ニアリ」という説明文のうち、「二丈許ノ古槻」が該当します。

樹高約 27 メートル、幹周約 7.3 メートル、主幹は地上約 3 メートル付近で数本の大枝に分岐し、枝葉の広がりなど樹勢は良好です。

なお、『新編武蔵風土記稿』にある「一丈二尺許ノ椹樹」は、山門右手にあるカヤを指しており、こちらは『梅岩寺のカヤ』として東村山市指定天然記念物に指定されています。

梅岩寺のケヤキ　山門外から

久米川古戦場

都指定旧跡　大正 8 年 10 月標識　昭和 27 年 4 月 1 日史跡指定
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定

狭山丘陵東麓（現在の八国山緑地）から柳瀬川にかけて広がる一帯は、古代に武蔵国府と上野国府を結ぶ東山道武蔵路が通り、鎌倉時代には鎌倉から上野国に向かう鎌倉街道が南北に縦断する交通の要衝でした。やがて戦乱の時代になると、久米川の地は入間川と多摩川の中間の軍事的な拠点として重視され、元弘 3 年（1333）に、新田義貞が鎌倉幕府倒幕のために挙兵し戦った〝久米川合戦〟、建武 2 年（1335）に北条時行が鎌倉幕府再興のために挙兵した〝中先代の乱〟や文和元年（1352）に足利尊氏ら北朝方と新田義興ら南朝方の軍勢による〝武蔵野合戦〟、応永 24 年（1417）には〝上杉禅秀の乱〟などの合戦の舞台となりました。特に有名な戦は元弘 3 年の〝久米川合戦〟です。新田義貞の挙兵に対し、幕府軍は鎌倉街道を北上、小手指ヶ原（所沢市）で一戦交えた後に久米川へと戦場を移しました。新田義貞は久米川の戦いで勝利をおさめた数日後に、鎌倉幕府を倒しました。久米川の戦いの拠点となった八国山緑地には、新田義貞が兵馬を指揮したと伝えられる「将軍塚」があります。

久米川古戦場跡

板碑〈元弘三年斎藤盛貞等戦死供養碑〉

重要文化財（古文書）　大正 3 年 8 月 25 日指定

板碑とは鎌倉時代から戦国時代にかけて建てられた板石の供養塔婆です。この板碑はかつて八国山に建てられていたもので、上部に光明真言の種子を刻み、中央に「元弘三年癸酉五月十五日敬白」の紀年銘、左右に「飽間斎藤三郎藤原盛貞、生年二十六、武州府中に於いて五月十五日打死せしむ」、「同孫七家行、二十三、同じく死す。飽間孫三郎宗長、三十五、相州村岡に於いて十八日に討死」と被供養者の氏名・享年・戦没場所と日付を示しています。さらに下方には「勧進　玖阿弥陀仏、執筆　遍阿弥陀仏」と建立者である時宗の僧の名が記されており、元弘 3 年（1333）の新田義貞の鎌倉攻めの際に戦死した飽間斎藤一族 3 名の菩提を弔うために建立されたものであることが分かります。

元弘 3 年 5 月 8 日、後醍醐天皇の勅命を受けて新田庄生品明神（現・群馬県太田市）で鎌倉幕府討幕の兵を挙げた新田義貞は、鎌倉街道を南下して小手指ヶ原・久米川・分倍河原・関戸の合戦を経て鎌倉に侵攻、5 月 22 日に幕府を滅亡させました。鎌倉街道の沿道には戦死者を弔う板碑や供養塔が数多く残されていますが、この板碑のように戦没日や場所まで記したものは珍しく、『太平記』巻十に伝える 5 月 15 日の分倍河原合戦をはじめとする新田軍の鎌倉総攻撃を史実として裏付ける貴重な資料です。

板碑〈元弘三年斎藤盛貞等戦死供養碑〉

東村山ふるさと歴史館

歴史館外観 © 東村山ふるさと歴史館

歴史館展示室 © 東村山ふるさと歴史館

東村山市は、古代の「東山道武蔵路」や中世の「鎌倉街道」を中心とした特徴ある歴史をもっています。東村山ふるさと歴史館は、その「みち」をテーマとする展示施設として、平成 8 年に開館しました。常設展示〝「再発見」- みちでつづる東村山の歴史 -〟では、原始・古代・中世・近世・現代に沿って、各時代に通っていた「みち」を主軸とし、市内で発掘された土器や石器、板碑や古文書、民具などを展示しています。展示室中央部には、多摩湖町で出土した「瓦塔」や重要文化財（古文書）「板碑〈元

弘三年斎藤盛貞等戦死供養碑〉」のレプリカ、国宝「正福寺地蔵堂」の模型などが展示されています。「みち」をテーマにした常設展示だけでなく、下宅部遺跡出土の丸木舟未成品やはた織り機も展示されています。また、特別展示室では様々なテーマで企画展・特別展が開催されるほか、古文書講座やはた織りなどの体験学習も実施されており、郷土の歴史や文化を身近に感じることができます。

正福寺地蔵堂

国宝（建造物） 昭和３年４月４日古社寺保存法による指定
昭和 16 年４月 24 日構造及び形式の変更
昭和 27 年３月 29 日国宝指定

正福寺地蔵堂は平坦な武蔵野の鎌倉街道から近い場所にあります。江戸時代、堂内の小地蔵を一体借り受け、願いが成就すると一体を添えて奉納する風習が広まりました。千体ほどの多くの地蔵がいらっしゃるとして親しまれ、毎年 11 月３日には「地蔵まつり」が行われています。

寺蔵の『千躰地蔵菩薩略縁起』（1802 年頃）によれば、北条時宗がこの地で鷹狩の最中に病に罹り、命も危なく見えたが、夢で黄衣の僧から一粒の丸薬を得て全快し、これは地蔵菩薩の霊夢であると感動し、ここに正福寺を建立したと伝わります。実際は、弘安元年（1278）、臨済宗建長寺の末寺として、北条一族の入宋僧無象静照（1234-1306）が師の南宋径山寺石渓心月を勧請開山として草創したものと考えられます。

地蔵堂は本尊を安置する仏殿で、昭和８年（1933）の修理で発見された墨書から、山号が金剛山で、建立年代が応永 14 年（1407）であることも確定しました。この時代の基準的な作品として大変貴重です。また、立体的な内部の構成、装飾細部の意匠まで、円覚寺舎利殿（国宝、鎌倉市）と大変よく似ています。高度に標準化され洗練された、室町前期の中規模禅宗仏殿の典型といえます。

柿（木の薄板）葺の入母屋造の屋根は強い反りがあり、放射状に広がる扇垂木と、三手先の詰組組物によって支えられています。平面は、三間四方に一間の裳階（庇）を廻し、裳階の開口部は、花頭窓や弓欄間、内開きの桟唐戸など、禅宗様の意匠を用います。内部は土間で、中央の奥に本尊を安置する須弥壇が設けられています。

須弥壇上部を見上げると、高い位置に大虹梁・大瓶束を組み、更に上部中央の鏡天井に向かって組物を積み上げた、迫り上るようなダイナミックな構造が目に入ります。頂部から流れるように配された垂木も見事です。

本尊の地蔵菩薩立像は、堂内に奉納された千体小地蔵尊像とともに、東村山市の文化財に指定されています。

正福寺地蔵堂

下宅部遺跡

下宅部遺跡漆工関連出土品

都指定有形文化財（考古資料） 平成21年３月16日指定　平成27年3月16日追加指定

下宅部遺跡は、東村山市多摩湖町四丁目、狭山丘陵を水源とする北川左岸の沖積低地に位置する旧石器時代から近世にかけての低湿地遺跡です。旧河道とその周辺にあることから、土壌に水分が多く含まれるために木材等によって構成された遺構、木製品等の残りが良く、数多く出土しました。

その中でも、縄文時代後期を中心とする精巧な加工を施された漆工関連出土品は特に優れたもので、櫛や簪、漆塗弓や容器、杓子、黒色漆や赤色漆が塗られた土器や土製耳飾などがあります。更に、樹液採取時の傷が確認されたウルシ材の杭、保管用・調整加工用・補修用・塗布用等の容器として使われた土器片、破損箇所を接着剤やパテとしての漆を用いて補修した漆接合土器なども出土しました。

これらは製品として優れているだけでなく、漆の採取を示す木杭、保管・調整加工・塗布方法を示す土器、そして漆で補修された土器が揃い、縄文時代の漆工技術や漆の使用方法を示すものとして極めて貴重な資料です。

漆塗弓の出土状況

「東村山市立八国山たいけんの里」には、市内の遺跡から出土した遺物が収蔵されており、下宅部遺跡の漆工関連出土品も、収蔵展示室で見ることができます。

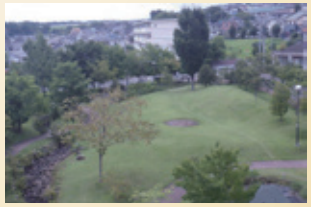
下宅部遺跡

都指定史跡 平成27年３月16日指定

漆工関連出土品が出土した下宅部遺跡は、八国山たいけんの里から西へ 300 mのところにあります。都営団地の建替えの際に発見され、平成８年から発掘調査が実施されました。

調査地点は北川の旧河道とその支流の合流地点周辺にあり、縄文時代の遺構としては、川の水流を遮るための木杭や丸太で堰状にした水場遺構、シカやイノシシの解体作業場、狩猟儀礼に関連する遺構など生業に関連したものが確認されました。遺物では土器や石器の他、上記の「漆工関連出土品」も出土しました。

当遺跡は、縄文時代の生業や漆工関連技術を示す遺構や遺物が充実した重要な遺跡であることから、一部が埋没保存され、現在は下宅部遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」として、地域の憩いの場となっています。


下宅部遺跡はっけんのもり